

## 2. 瀬戸内海が担ってきた役割とその価値

### 1) 概要

瀬戸内海は、本州、四国、九州の島に囲まれた日本最大の閉鎖性海域であり、紀伊水道、豊後水道から太平洋へ、また、関門海峡から響灘を通過して日本海へ通じている海域である。東西約450km、南北15～55km、面積23,203km<sup>2</sup>、平均水深38mで、約700もの島がある。また、湾、灘、瀬戸なども多く存在する変化の富んだ海域となっている。

瀬戸内海は、豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、気象学的には瀬戸内気候区として位置付けられており、平均気温16℃、年間平均降水量1,000～1,600mmという温暖少雨の気候である。瀬戸内海を取り巻く山間部は、多雨地帯で約3,000mmの年間降雨量があるため、668水系もの河川から年間約500億m<sup>3</sup>の水が流れ込むという特徴を持つ。

瀬戸内海は、1950年代後半に始まる高度経済成長期から大きく様子を変え始めた。この沿岸には、多くの工業地域（新産業都市、工業整備特別地域）が形成され、日本全体の製造品出荷額の27%を占める重要な生産拠点として発展し、生活基盤が整っているため、日本全体の27%に当たる約3,500万の人々が生活しており、全国平均の2倍の人口密度を示す地域となった。さらに、工場用地の確保や、航路の確保のために、埋め立てや浚渫が大規模に行われてきた。このため、藻場・干潟の減少や陸域から瀬戸内海に対する環境負荷が非常に大きなものとなったため、水環境や生物の生息環境が悪化することとなった。



### 2) 海上交通

瀬戸内海は、穏やかな海であるため海上交通の要衝として古くから利用されてきた。縄文時代には、姫島（大分県）で産出される黒曜石を各地へ運ぶ経路として利用され始めた。奈良時代には遣隋使、遣唐使船の航路として利用され、平安末期には平清盛による音戸の瀬戸（広島県呉市）の開削や、福原の泊（神戸市）の整備など中国・宋との貿易のための航路整備が進められるなど、海外との文化や貿易の橋渡しの場として利用されてきた。

瀬戸内海を往来する人が増え海上交通が発展するとともに、船頭が多く育ち、塩飽諸島では塩飽水軍を組織するまでに勢力を伸ばしてきた。織田信長は全国統治のため、堺や兵庫の港を治めるために塩飽の船頭の協力を取り付け、報償として朱印状により特権を与えた。その後、豊臣秀吉、徳川家康は、島民650人に1,250石の塩飽7島を与え、船方に任命し海上輸送にあたらせた。この人々たちを大名・小名に対して「人名（にんみょう）」といい幕府の船方の任にあたらせた。この人名制は、代表者を年寄と呼ぶ制度で、瀬戸内海以外では見ることはできない独特のものである。

更に、江戸時代には河村瑞賢により西廻りの航路が開発され、大坂より蝦夷に向かう北前船が就航することにより、国内の物流を支える重要航路として、また諸大名の参勤交代や朝鮮通信使など

大陸との文化交流のための航路として発展することになった。この北前船の航海安全のために上関（山口県）、尾道（広島県）、御手洗（広島県）、鞆の浦（広島県）、下津井（岡山県）、室津（兵庫県）等の港が整備され、瀬戸内海が大いに繁栄した時代となった（図1）。

また、西廻りの航路に加え、西国街道・京街道などの陸路が整備されたことにより、京都や大坂などの関西方面をはじめ日本各地に瀬戸内海の産物を運ぶことが可能となり、瀬戸内海は日本の大動脈として最盛期を迎えた。

現在も、瀬戸内海沿岸には重化学工業を中心とするコンビナートが形成されているため、各工場に必要な原材料や燃料、また製品を輸送するための大型船舶の航路として海上交通の重要なルートに位置付けられ、国内の船舶航行数、船舶輸送の50%を占めている。大型船舶の航行のため、備讃瀬戸など浅瀬で航路浚渫が大規模に行われたために、海生生物の生息環境に影響が出ているとの指摘もある。

このように、瀬戸内海は古くから現在に至るまで物資の輸送や人の往来・文化を伝えるためのルートとして重要な役割を果たしてきた。

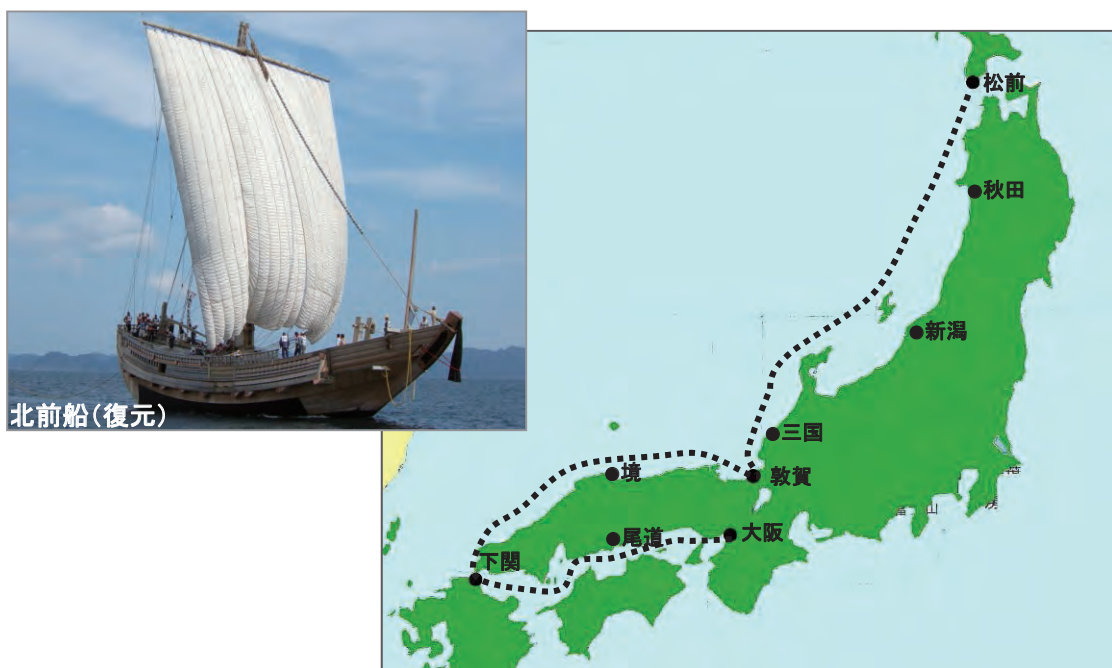


図1 北前船の航路と主な寄港地

### 3) 農業

瀬戸内海は、温暖な気候で穏やかな環境に恵まれていることから、古くから付加価値の高い農産物が生産されてきた。昔から現在に至るまで我が国有数の農産物の生産地として知られ、それらを利用した加工産業が発達した地域となっている。現在でも、穀物、野菜、果樹、花卉類を中心に国内有数の生産量を誇っている。

特に農業が発展したのが江戸時代であり、木綿、イ草、小麦、大豆、コメ、柑橘類、樫、サツマイモなどが藩の奨励により盛んに栽培され、それらの産物は千石船などで日本各地へ運ばれた。綿花は瀬戸内海の気候風土に適していたため盛んに栽培されるようになり、江戸時代末期から明治時代にかけては、新田を開発しながら生産量を増やし国内有数の綿の産地となった。北前船で綿を北海道へ運び、東北、北陸方面からは、綿の栽培に必要な魚肥が運ばれて来るといふ流通形態が成立していた。その綿を利用した伊予絨、備後絨が久留米絨と共に日本三大絨の産地として隆盛を極めることになった。瀬戸内海の島しょ部では平地が少なかったことから、段々畑の開墾が進められ、サツマイモ、除虫菊、柑橘類などの栽培が盛んに行われていた。瀬戸内海では、この綿、小麦、大豆等を栽培するために魚肥が使われ、取れた綿で網を作りイワシを獲る。獲れたイワシを使い出汁